

戦時下の日本におけるモーリス・バレスの受容について

田 中 琢 三

はじめに

モーリス・バレス (Maurice Barrès, 1862-1923) は、ベル・エポック期フランスの代表的な小説家であるとともに、伝統主義的なナショナリズムの喧伝者として同時代の青年に深い影響を与えた思想家でもあった。また、文学者として絶大な人気を博しただけではなく、長年に渡ってフランスの国会の下院議員として現実の政治に直接的に関与した¹⁾ バレスは、近代のフランス文学史において特異な位置を占める重要な作家である。しかし、ファシズムの先駆ともいわれるその極右的な政治思想のために、第二次世界大戦後の日本では、国家主義や反ユダヤ主義のイデオログとして論じられることはあるものの²⁾、バレスが文学者として学術的な研究の対象となることや、その作品が翻訳されることは極めて少ないのが実情である³⁾。

しかし戦前は、バレスは同時代のフランスを代表する作家の一人として日本に紹介され、とりわけ戦時中にその主要な作品が翻訳、出版されている。本論考では、おもに第二次世界大戦期の日本においてバレスがどのように受容されたのかを検討したい。軍国主義や全体主義と親和性の高いバレス作品の受容のあり方は、戦争という時局の影響が色濃く反映されたものであり、それを明らかにすることで、戦時下における我が国の外国文学受容の側面が浮き彫りとなるであろう。特に戦前に訳された彼の作品のなかで最も反響が大きかったと思われる1938年刊行の『科学の動員』(*Pour la haute intelligence française*, 1925) に焦点を当て、この訳書の出版が戦時中の日本においてどのような意義をもっていたのかを、当時の科学動員政策との関係において考察したい。

I. エミール・エックによるバレス

我が国で最も早いある程度まとまったバレスの紹介は、おそらく1909年に『帝国文学』3月号に掲載された広瀬哲士 (1883-1952) の「最近仏蘭西小説の傾向 続編」⁴⁾ であろう。この記事ではポール・ブルジェ (Paul Bourget, 1852-1935)、ルネ・バザン (René Bazin, 1853-1932)、アンリ・ボルドー (Henry Bordeaux, 1870-1963) などおもに同時代の伝統主義的な小説家に取り上げられているが、バレスについては連作小説『国民的エネルギーの小説』(*Le Roman de l'énergie nationale*, 1897-1902) の作品が中心的に言及されている。広瀬によるとバレスは「現時の仏蘭西文学界に至って大きい影響を及ぼして居る許りで無く、一般社会に非常な影響を蒙むらして居る⁵⁾」作家だという。また、バレス作品の最初の邦訳は、1915年5月から1916年1月にかけて『白樺』に掲載された新城和一 (1891-1952) の翻訳による『ロオレンの少女』である。これはバレスの小説『コレット・ボドッシュ』(*Colette Baudoche*, 1909) の全訳であり、1919年に単行本として刊行された⁶⁾。その序文で新城はバレスに関して「仏蘭西現代作家中の最も有名な一人であって

(中略) 二十世紀の真理と理想とを厭くまで追求せんとする芸術家の先駆者となり、一方に愛国心の昂揚を絶叫して、此度の欧州大戦にも、仏蘭西人の精神に偉大なる感化を及ぼした人⁷⁾」と紹介している。

「此度の欧州大戦」とは1914年に勃発した第一次世界大戦のことであるが、この大戦中に『コレット・ポドッシュ』が訳された背景には、東京帝国大学仏蘭西文学科(以下「東大仏文」)の初代教授であるエミール・エック(Émile Heck, 1866-1943)の存在がある⁸⁾。彼は明治時代のいわゆる「お雇い外国人」のひとりであり、1891年から約30年間、東大仏文で教鞭を執っており、広瀬哲士も新城和一も彼の教え子であった。カトリックの聖職者であり、アルザス地方のテリトワール・ド・ベルフォール県出身のエックは、フランスの文化的伝統を擁護し、17世紀の古典主義を文学の理想とする愛国者であって、ブルジェやパレスに代表される伝統主義的なナショナリズムを主張する同時代の作家を高く評価していた。特にエックとほぼ同世代であり、彼と強い反ドイツ感情を共有していたロレーヌ地方出身のパレスに対しては、思想的、心情的に並々ならぬ共感を抱いていたと思われる。

エックは1916年の初頭に東京日仏協会の会合でパレスに関するフランス語の講演を行っているが、その講演原稿が東大仏文の教え子である太宰施門(1889-1974)によって日本語に訳され同年の『太陽』5月号に掲載されている⁹⁾。それによるとエックの講演は、まず当時53才であったパレスの半生を語り、次にその著作を年代順で紹介している。彼はパレスを小説家、思想家、芸術家、政治家、ジャーナリスト、そして何よりも愛国者として称賛しているが、以下に引用する講演の締めくくりの部分では、当時まさに激化の一途をたどっていた第一次世界大戦が言及されている。

(前略) パレス氏の中に唯だ或る大作家が居るという許りでなく、或る偉大な仏蘭西人、羅匈、もつと正確に言えばガローロマンの文化、真の文明の天啓を受けた唱歌者の宿って居る事を讃美したいと思います。またこの文化と文明を承継いだ仏蘭西の勇敢な兵士が、神とまた彼等の有力な同盟国、その中には気高い、有名な日本をも加へねばならぬのでありますがこれ等の助けを借りて、華々しい、決定的な勝利を得ん事を私は期待して居るのであります¹⁰⁾。

エックによるとパレスが体现するフランス精神には「真の文明」であるガロ・ローマ文化が継承されており、その文化的伝統が戦争においてフランスを勝利に導く助けになるのである。ここには自国の文化の優位性を前提として、文化が軍事力と同様に国力の源となるというエックの文化的ナショナリズムがよく表れているが、当時のエックにとって喫緊の関心事は何よりも対ドイツ戦争であって、同盟国である日本で行ったこの講演では、戦争によって激しく高揚した彼の愛国主義とドイツへの敵対感情がはっきりと表明されている。

エックは講演の後半で『コレット・ポドッシュ』のあらすじを詳細に紹介しているが、それはこの小説が普仏戦争後にドイツに占領されたメスを舞台に、フランス人としての義務と名誉のために愛するドイツ人の求婚を拒絶する少女コレットの物語を通じて、愛国心と対独復讐心を鼓舞する内容であるからに他ならない。前述したように『コレット・ポドッシュ』はエックの教え子である新城和一によって訳されているが、その翻訳が雑誌に発表されたのは、エックの講演が行われた時期と重なっている。おそらく新城はフランス人の師から何らかの示唆を受けてこの小説を訳したのであろう。

注目すべきは、エック自身が、『コレット・ポドッシュ』などのパレスの作品にみられる「未だ半ば野蛮な、傲慢と、粗野と、暴力と、お人好しの自誇れで出来て居る¹¹⁾」ドイツ精神と「ずっと人間的な、謙遜と、温和と、勇敢と、寛仁と、気高い自信から出来た¹²⁾」フランス精神という偏ったイメージを正しい

認識として肯定していることで、聴衆に反ドイツ感情を植えつけようとする意図すらも感じられる。フランスの同盟国とはいえ限定的な参戦にとどまった第一次世界大戦期の日本の状況を考えると、バレスそしてエックの激しい愛国的、反ドイツ的な言説は、当時の日本人にとっては全面的には共有できないものであったと思われる。

実際、エックの熱烈な賛辞にもかかわらず、大正時代の日本にはバレスの作品はほとんど紹介されていない¹³⁾。これは彼と同時代に活躍したフランスの作家であるエミール・ゾラ (Émile Zola, 1840-1902) やアナトール・フランス (Anatole France, 1844-1924) の小説がこの時期に盛んに訳されていたのとは対照的である。また、新城和一は『コレット・ポドッシュ』を翻訳する直前に「モオリス・バレス論」を『白樺』に発表している¹⁴⁾ が、そこではバレスを近代思想の先駆者として高く評価しながらも、この作家の偏狭なナショナリズムや伝統への固執に対して疑問を呈し、さらに芸術家としてはロマン・ロラン (Romain Rolland, 1866-1944) よりも低い地位にあるとしている。いずれにせよ、我が国でバレスの作品が相次いで翻訳、出版されるのは、日本が総動員体制を敷いた第二次世界大戦の時代であった。

II. 戦時下の日本におけるバレス

1932年にバレスの代表作である三部作『国民的エネルギーの小説』の第一作『根こぎにされた人々』(*Les Déracinées*, 1897) と、初期の三部作『自我礼拝』(*Le Culte du moi*, 1888-1891) の最終巻『ベレニスの園』(*Le Jardin de Bérénice*, 1891) の翻訳を収録した新潮社の『第二期 世界文学全集』第一巻が刊行される¹⁵⁾。訳者である吉江喬松 (1880-1940) の解説によると、「日本の現代は (中略) 経済困難、個々人の生活難、従って政治の危機を考へさせらるる時代¹⁶⁾」であり、数多くの「根こぎにされた人々」、つまり生活や精神の抛り所を失った若者たちが不安と焦燥の中で生きている時代であるという。実際、この頃の日本は1930年に始まった昭和恐慌による不景気に襲われており、社会不安が広がっていただけでなく、1931年には満州事変が勃発し、1932年には五・一五事件が起きている。ただし、こうした当時の不穏な社会状況がこの翻訳が刊行されることになった直接の要因になっているのかどうかは不明である。

注目すべきは、吉江訳の『根こぎにされた人々』が7年後の1939年に再版され、新潮文庫に入ったことである¹⁷⁾。その2年前の1937年から日中戦争が始まり、1938年には我が国で国家総動員法が成立している。おそらく『根こぎにされた人々』の文庫化はこうした時局を反映したものであろう。実際、新潮文庫版のために書かれた訳者による「追記」には、以下のような記述がある。

(前略) 我々はいま国民的一大使命に覚醒して、東洋永遠の平和のために、一糸乱れぬ結合をもって聖戦に従事しているのである。

個人の自由、自己崇拜の思考から、民族心への覚醒及び帰結、この必然の経過を示すのがモオリス・バレスの文芸である。

民族心に結ばるといふことは、現在世界に於て日毎起りつつある切実な現象である。その中に於いてこそ人々は始めて根を大地へおろして安住し得らるるのである。

『根こぎにされた人々』こそは今日に於て改めて、熟読せらるべきものたることを切に感じる¹⁸⁾。

「追記」の日付は第二次世界大戦が勃発する直前の「昭和十四年七月」となっているが、エックが講演を行った第一次世界大戦期とは異なって、本格的な戦時体制下にあった当時の日本では、国民を「民族心」

で結びつけることが急務であり、個人主義者から民族主義者へと転向したバレスの思想遍歴がそのモデルとして必要とされたのである。1940年には本田喜代治（1896-1972）が翻訳した『コレット・ポドツシュ』が出版される¹⁹。社会学者の本田はおそらく経済的な理由によって本書を訳したと思われるが、特筆すべきは巻末に付された権守操一による「モオリス・バレス略年譜」である。これはいくつもの資料を参考に作成された労作で、今でも日本語で書かれた最も詳細なバレスの年譜であるといえる。

1941年には河出書房の『新世界文学全集』の一冊として伊吹武彦（1901-1982）の訳による『自我礼拝』が刊行される²⁰。これは戦前に出版されたバレス作品の翻訳の中で、最も分量があり、最も質が高い優れた訳業であり、行き届いた注が数多く付けられている。巻末の「訳者後記」によると、伊吹が難解な『自我礼拝』を訳した理由は二つあり、一つはこの三部作がバレスの思想的出発点であり、この作家を理解するうえで重要な作品であること、もう一つはバレスにおいて自我の探求が「土と死者」の教義に帰結したことに興味を持ったからであるという。そして、バレスの愛国主義と伝統主義の根底にある「土と死者」の思想がヒトラーに与えた影響が以下のように指摘されている。

ドイツでは最もよくバレスが紹介され註解された。ヒットラーの唱える合言葉「血と土」Blut und Bodenは、まさしくバレスの説くところの「土と死者」la Terre et les Mortsと殆ど符節を合しているではないか。（中略）「土と死者」の教義は遂にフランスを救うことが出来ず、突如ラインの彼岸に旺盛な展開を見せ、それゆえに、今やバレスの祖国は敗れたのであることを思うとき、われわれは思想が一種の怪物であることを、諸刃の刃であることを痛感せずにはいられない²¹。

当時フランスはナチス・ドイツの占領下にあり、前年の1940年には日独伊三国同盟が締結されていた。注目すべきは、こうした状況にもかかわらず、あるいはそれゆえに、伊吹がバレスやヒトラーの思想を批判も称賛もせず、あくまで客観的な分析を行っていることである。しかし「訳者後記」の最後では、バレスの思想の「余韻」が、時と場所を隔てた日本にとっても「全く無縁とは思われない²²」と記し、控えめに当時の我が国の全体主義的な戦時体制を暗示している。

このように伊吹武彦の文章が政治的、イデオロギー的に中立を保っているに対して、『新世界文学全集』の月報に掲載された辰野隆（1888-1964）の文章はバレスの思想への傾倒をはっきりと表明している。

（前略）自我の深淵を探り尽し、苦難して個人主義の殻を徐に脱却しつつ、闇黒な『我の存在』を祖先に国土に国家に離れ得ぬまでに結びつけて、光明をみざす全体主義に対しては心からなる崇敬と思慕とを捧げざるを得ぬのである。

此の意味に於いて、モーリス・バレスの『自我礼拝』なる標語の下に一括せる三部作（中略）には千鈞の重みがある。

読者は（中略）その自我の味爽の暗さに何処から曙光が射しこんで来たかを、仏蘭西の問題としてではなく、我等の祖国の関心事として熟慮し三省すべきであろう²³。

ここで示唆されているように、個人を「土と死者」を通して国家と結びつけるバレスの全体主義的な思想は、国家総動員体制化の日本において「関心事」になりえたのであり、辰野によるとそこに『自我礼拝』の翻訳、出版の意義が見出せるのである。なお、この伊吹訳『自我礼拝』は、戦後にも再版されており²⁴、我が国におけるバレスの紹介に大きな役割を果たしたと考えられる。

Ⅲ. 『科学の動員』の出版とその内容

日本におけるバレス作品の翻訳のなかで戦時下の時局と最も関係が深いのは、1938年に刊行された『科学の動員』である²⁵⁾。フランス語の原書はバレスの死後2年目に当たる1925年に刊行されている。フランス語の原題 *Pour la haute intelligence française* は直訳すると『フランスの高い知性のために』であり、『科学の動員』という日本語タイトルは訳者がいわば恣意的につけたものである。この本は第一次世界大戦後のフランスにおいて科学研究の必要性和その予算の増額を訴える晩年のバレスの論考などを集めたものであるが、現在では本国フランスでも読まれることはなく、忘れ去られたバレスの著作のひとつとなっている。

『科学の動員』は文部省の外部団体である日本学術振興会の名義で訳され、同会が出版している。この翻訳書の巻頭には、物理学者で翌年に日本学術振興会の理事長になる長岡半太郎の「はしがき」がおかれている。それによると長岡が日本学術振興会にこの本の翻訳を勧めたようであるが、彼がどのような経緯でこのバレスの著作に関心を抱いたのかは不明である。そして「はしがき」に続く日本学術振興会による「凡例」では以下のように述べられている。

本書刊行の目的は、フランスの文豪として思想家として憂国家として知られたバレス氏の人格や名文を紹介するためでも無く、又代議士として議政壇上に立ち、或はフランス国民の愛国心に訴え或は敵国ドイツの長所を指摘して全院を傾聴せしめたバレス氏の熱誠と雄弁を讃美せんとするためでもなく、我国における他山の石たらしめんことを希望するにほかならぬのである。言うまでもなくフランスと我国とは国体をはじめ各種の事情を異にしているのであるが、その時弊を論じた中には我が国のことを言っているのでは無いかと思われしめる節もある。勿論彼は当時のフランスのために警鐘を撞いたのであるが、恰も今日に於ける我が国の非常時態及び馳て来るべき平和克復後に於て最も必要なる学術振興の急務と科学者養成の方法とを論述しておいたものの如くにも見られるのである²⁶⁾。

この本が出版されたのは、バレスという人物に対する関心からではなく、「他山の石」という表現が示すように、バレスが主張した「学術振興」や「科学者養成」の方策を日本における科学技術政策の参考にするという極めて実用的な目的があったのである。

そして1942年には翻訳の文章を全面的に書き改めた『科学の動員』の改訂版が刊行される。改訂版が出されたのは、翻訳の修正のためもあるが、やはり戦時下の時局がかなり関係していると考えられる。初版が刊行された4年前と比べて、日本の置かれた状況は緊迫の度を増していた。1939年に第二次世界大戦が勃発し、1940年にフランスはドイツに占領され、1941年に日本はアメリカとの戦争に突入していた。長岡半太郎は「改訂版はしがき」で以下のように述べている。

ここに於て吾学術振興会は、(中略) 国難打開に適應する攻究を作興して、東亜共栄圏の確立に貢献せんと欲し、日夜其目的の達成に腐心しつつあるに際し、聊かバルレス〔原文ママ〕の意見を強調し、之を具体化して、時難を克服するの要を痛感する次第である²⁷⁾。

つまり『科学の動員』は戦時下において「東亜共栄圏の確立に貢献」するために国策の一環として出版された書物なのである。それではこの著作で展開されているバレスの「意見」とは具体的にどのようなものであったのか、以下で検討してみたい。

前述したように『科学の動員』は死後出版であり、バレス自身が編集したものではない。この本の匿名の編者は全体を三編に分けている。第一編は出典は明記されていないがバレスが新聞や雑誌に発表した論考が収録されており、第二編は下院議員であったバレスの議会における演説や発言、そして新聞のインタビュー記事から構成されている。第三編は彼が残した手書きのメモを集めたもので、原書の注によれば、これらは「フランスの高い知性」に関する本を書くための覚え書きであったようである²⁸⁾。

バレスの主張がまとまった形で述べられているのは、第一編の第一章「フランス知的機構の再建」と第二編の第一章「実験室の惨状」であるが、それらを中心に本書の内容を要約すると以下ようになる。第一次世界大戦は潜水艦、航空機、戦車、毒ガス、無線通信などが使用された科学戦であり、科学の重要性を浮き彫りにした。国際的に孤立していたドイツが、4年間もフランスと戦争を続けることができたのは、以前から科学の振興に力を入れており、戦争のために科学研究やその施設が組織化されていたからである。ドイツの科学者はフランスの科学者のおよそ10倍の約3万人も存在し、フランスの科学者が戦地に赴いたのに対して、ドイツの科学者は研究所にとどまり、技術者として活躍したのである。しかし、最初はドイツに圧倒されていたフランスも科学者の知力を結集して反転攻勢にでた。一例を挙げると、ドイツが使用した毒ガスに対抗するために、フランスの化学者たちが別種の毒ガスを新たに開発して反撃し、勝利を収めることができた。このように大戦においてフランスを救ったのは科学者たちであるが、彼らは平時においてもフランスに貢献することができる。なぜなら科学の振興は、農業や工業を発展させ、戦争で疲弊したフランスを再建するだけでなく、国家にさらなる富と名声をもたらすのである。しかし、現実には大戦後のフランスにおいても、科学者の環境は劣悪であり、研究施設も十分に整っていない。それを改善するためにフランスの文部省は科学研究のための予算を増やすべきである。

以上が『科学の動員』の概要であるが、指摘すべきはバレスにとって第一次世界大戦の教訓は、国家としての科学政策の重要性であり、彼はその点におけるドイツの優位性を認め、敵国をあえて称賛していることである。この本の特徴のひとつは、フランスが常にドイツと比較されていることで、例えば、場当たりに臨機応変に戦うフランスと、準備された組織の力で戦うドイツを対比させることによってフランスの戦時体制の不備を浮き彫りにしている。また、大戦中の両国の軍事産業などに関する細かいデータが列挙されたり、科学研究の観点からフランスの研究機関、特に大学の制度や設備面における問題点を事実的に即して鋭く指摘するなど 現実的、説得的な議論が展開されている。注目すべきは、こうしたバレスの演説や働きかけによって、実際に研究関連予算の一部が増額されただけでなく、新たに「科学研究助成委員会」という組織が設立され、そこに寄付金や助成金が集められるシステムにするなど、具体的な成果が得られたことである。日本ではほとんど知られていないが、バレスは単なる右翼思想のイデオログではなく、こうした政策に取り組んで実現させる実務的な政治家でもあった²⁹⁾。

IV. 日本の科学動員政策との関係

ほとんど政策論集といえるこのバレスの著作が、戦時下の日本で翻訳された背景をより詳しく探るためには、以下では戦前の我が国の科学政策、特に科学動員政策について触れておく必要がある。新兵器の登場や長期の総力戦によって戦争のあり方を変えた第一次世界大戦は、フランスのみならず日本の科学政策にも大きな影響を与えた。ドイツ製品の輸入が困難になったことを契機に重化学工業が発展するとともに、国家の意志によって国のあらゆる人的・物的資源を統制運用する国家総動員の必要性が唱えられたのである。そして日本の総動員体制は第一次世界大戦中の欧米の事例を参考に整備されていくのだが、その

中に科学動員、つまり戦時において科学研究を政府の管理統制下に置くことも含まれていた。

そして1937年に日中戦争が始まったのを契機に、我が国において科学動員が差し迫った課題となり、翌年には国家総動員法が制定され、科学動員の体制も具体化されていく。戦時下における科学動員に寄与した主要な組織のひとつが、バレスの『科学の動員』を翻訳・刊行した日本学術振興会であった。日本学術振興会は1932年に財団法人として設立され、研究の実施や他の個人や機関の研究に対する補助をおもな事業とした。そして1937年に日中戦争が始まると、この戦争に必要な研究を促進するための「事変緊急研究」の採択を開始し、1941年に太平洋戦争が勃発すると同様の目的から「時局緊急研究」を設けるなど科学動員政策の一端を担っている³⁰⁾。バレスの著作の翻訳も、間接的ではあるがそうした戦争協力の一環として出版されたのであった。

長岡半太郎の「改訂版はしがき」によると、『科学の動員』の初版は「出版以来、科学研究者の間に好評を博し、之を耽読せるもの数多³¹⁾」あったという。おそらく日本学術振興会のねらいも、一般大衆ではなく、学者や知識人、あるいは官僚にこの本が読まれることにあったと思われる。つまりバレスの著作を通じて、戦時における科学の重要性を日本の指導層に改めて認知させることは、日本学術振興会自体の発展のためにも好ましいことであったはずである。それでは『科学の動員』は当時のエリート層に実際にどのように読まれたのであろうか。

それを明らかにすることは困難であるが、例えば、初版の刊行から約3ヶ月後の1939年3月6日付『東京朝日新聞』朝刊に物理学者であり歌人でもある石原純（1881-1947）による書評が掲載されている³²⁾。石原によると、日本において科学動員は具体的な政策を立てて早急に実行すべきであり、その意味でバレスの著作を読むことは極めて有益であるという。ただし石原が長岡半太郎の直接の弟子であることを考え合わせると、この書評はもっぱら宣伝目的で書かれた可能性が高いと思われる。

注目すべきは1939年4月7日付の『東京朝日新聞』に掲載された宮本武之輔（1892-1941）の論考『工業教育の要諦：工業教育刷新論(1)』においてバレスの主張が引用されていることである³³⁾。ここでは『科学の動員』という書名は明記されていないが、この本を出典にしていることは明らかである。戦時に必要とされる技術者を育成するための教育を論じたこの記事で、宮本はバレスが指摘していた第一次世界大戦時におけるドイツは三万人、フランスは三千人という科学者の数の差に言及し、それを日本にとっての貴重な教訓であるとしている。また「モーリス・バレスも、技術者の研究の実用化に熱心なことにかけては戦争中ドイツに匹敵するものはないと絶賛している³⁴⁾」などと述べ、バレスの見解を援用しながら論を進めている。

宮本武之輔はもともと内務省の技師として土木事業に携わっていた技術官僚であり、当時は興亜院の技術部長であった。1941年には企画院の次長となり、第二次近衛文磨内閣によって進められた全体主義を目指す新体制運動に参画し、戦時に対応した科学技術行政の整備に尽力するが、同年12月に56才の若さで肺炎により急逝した。ちなみに「科学技術」という用語は1940年に使用され始めた新語であり、科学者と技術者が協力して成果を上げることが求められた挙国一致の戦時体制を反映した言葉である。いずれにせよ、宮本は太平洋戦争の直前まで日本の科学動員政策のまさに中心に位置する人物であった³⁵⁾。

宮本は1941年に『科学の動員』というバレスの翻訳と全く同じタイトルの評論集³⁶⁾を刊行しており、その中には科学動員の必要性和方策を説いた「科学動員論」³⁷⁾が収録されている。注目すべきはこの論文が、バレスと驚くほど似た主張を展開していることである。例えば、以下のような箇所がある。

研究機関の整備充実は、これまた急速に具現されなければならない。わが国の研究機関はその数に

においては必ずしも少ないとはいえないが、その内容において非常な劣勢にあることは周知のとおりである。例えば研究員の数において、研究設備において、または研究基金において、米国や独逸とは殆ど比較にならないほどの貧弱さである。(中略)

国力は研究室の中から。これがドイツの政治と経済とを一貫する指導精神であることを思うときに、研究軽視のわが国の伝統的国民思潮の革新こそ、焦眉の急務たる所以が痛感されてならない³⁸⁾。

宮本にとって、バレスの著作を通して伝えられたフランスの事例はまさに「他山の石」となった。第一次世界大戦期のフランスと第二次世界大戦期の日本の状況は似たものであり、国家総力戦において科学動員が急務であるにもかかわらず、それに対する政府の人的、物的な投資が不足していた、あるいは少なくとも当事者はそのように「痛感」していたのである。そして、宮本自身は日本の科学動員政策を技術院に集約させることを構想していたが、実際は技術院、文部省、陸軍、海軍などが別々に科学動員を実施することになり、終戦に至るまで一元化することができなかった。

そして日本とフランスの違いのひとつは、我が国にはバレスのような影響力のある雄弁な政治家がいなかったことである。この点に関して、長岡半太郎は初版の「はしがき」の末尾で以下のように記している。

本邦に於てもバルレス〔原文ママ〕の如き能文の士が、吾人が当面最も痛切に感ずる科学研究を鼓舞する為に其筆を揮われ、困迫せる研究費の補足すべきを国民の脳裏に浸潤せしめられんことを希うて、此訳篇を出版する機会を捉え読者の猛省を促すのである³⁹⁾。

そして、ある意味において日本でこのバレスの役割を果たそうとしたのが宮本武之輔であった。宮本は土木技術者であるが、他方では文筆家でもあり、前述した「科学動員論」を始めとして一般向けの科学や技術に関する文章を新聞や雑誌に数多く発表しているが、そこにはやはり国民に科学技術の重要性を知らしめるという目的があった。しかし、晩年の宮本は、日本の科学技術政策の中心に位置していたとはいえ、フランスにおけるバレスのような社会的知名度や影響力を持たない一人の技術官僚であり、日本的な縦割り行政や技術者を重用しない当時の官僚組織のなかで苦闘し、志半ばにしてこの世を去ったのである。

おわりに

戦前の我が国におけるバレスの受容は20世紀の二つの世界大戦と密接に関係しているといえるだろう。エミール・エックは1916年に行った講演で、バレスを愛国心とドイツに対する復讐心を体現する作家、あるいはフランスの文化的ナショナリズムの具現者として紹介したが、それはまさにこの当時フランスと日本が参戦していた第一次世界大戦を念頭においたものであった。その後、バレスの著作は戦前の日本における軍国主義や全体主義の台頭という時局の影響を受けながら紹介されてきた。そして、戦時体制そのものを直接的に論じた『科学の動員』は、もともと第一次世界大戦を教訓にしてフランスにおける科学振興の重要性を説く著作であったが、その翻訳は我が国において科学動員が差し迫った問題となった1938年に出版され、第二次世界大戦中の1942年に改訂版が刊行されているのである。

バレスとともにベル・エポック期フランスの伝統主義を代表する作家であるポール・ブルジェの作品も、戦時下の日本で盛んに紹介されている。ただし、ブルジェの場合は、広瀬哲士が訳した小説『死』(*Le Sens de la mort*, 1915) が1939年に刊行されてベストセラーとなった⁴⁰⁾ が、バレスの著作の翻訳が一般大

衆に広く読まれることはなかった。それは、バレスの場合は、作品そのものの面白さよりも、『科学の動員』に代表されるように、戦時体制にその思想が有用であるという実際的な理由によって紹介されたからであろう。極右的なイデオロギーを標榜するバレスは戦時中の我が国の知識層や指導層に歓迎された。しかし、彼らによっていわば上から紹介されたこの作家の「有用」な思想は、戦争が終結すると必然的に忘却される運命にあったのである。

注

- 1) バレスは1889年から1893年、そして1906年から1923年に死去するまでフランスの下院議員を務めた。
- 2) 例えば、以下の政治思想史の研究でバレスが言及されている。中谷猛『近代フランスの自由とナショナリズム』、法律文化社、1996年；深澤民治『フランスにおけるファシズムの形成：ブーランジスムからフェローまで』、岩波書店、1999年。
- 3) 戦後のバレスの代表的な研究として以下がある。福田和也『奇妙な廃墟：フランスにおける反近代主義の系譜とコラボラトゥール』(1945：もうひとつのフランス 別巻)、国書刊行会、1989年(第2章「モーリス・バレス：フランス・ナショナリズム、または幕間の大活劇」)。また戦後に翻訳されたバレスの著作として以下がある。「ボードレールの狂気」、原島恒夫訳、『フランス世紀末叢書第14巻 評論・随想集』、国書刊行会、1990年所収；『国家主義とドレフュス事件』、稲葉三千男訳、創風社、1994年(*Scènes et doctrine du nationalisme*, Juven, 1902. の上巻のみの翻訳)；『グレコ：トレドの秘密』、吉川一義訳、筑摩書房、1996年。『精霊の息吹く丘』、篠沢秀夫訳、中央公論新社、2007年。またエル・グレコに関する美術論『グレコあるいはトレドの秘密』(*Greco ou le secret de Tolède*, 1911) が、戦前と戦後に二回翻訳されている(『エル・グレコ：トレドの秘密』、関口俊吾・三輪啓三訳、白水社、1943年；『グレコ：トレドの秘密』、吉川一義訳、筑摩書房、1996年) が、我が国におけるバレスの紹介は非常に限られたものであり、抒情的で情熱的な芸術家としてのバレスの美学や、政治家としてのバレスの活動に関してはほとんど知られていない。これはバレスという複雑で捉えがたい作家の全体像を把握するうえで大きな欠落というべきであり、我が国における今後のバレス研究の進展が待たれるところである。
- 4) 広瀬哲士「最近仏蘭西小説の傾向：続論」、『帝国文学』、第15巻第3号、1909年3月、35-48頁。本論文では、旧字体は新字体に、歴史的仮名遣いは現代仮名遣いに書き改めた。
- 5) 同上、38頁。
- 6) 『ロオレンの少女』、新城和一訳、洛陽堂、1919年(初出：『白樺』、第6巻第5号、1915年5月、41-64頁；第6巻第6号、1915年6月、23-45頁；第6巻第7号、1915年7月、112-120頁；第6巻第8号、1915年8月、25-48頁；第7巻第1号、1916年1月、38-86頁)。
- 7) 同上、「序」、1頁。
- 8) エックに関する研究には以下のものがある。西堀昭「エミール・ルイ・エック(1866-1943)」、手塚豊編『近代日本史の新研究III』、北樹出版、1984年、33-64頁；村田裕和「仏蘭西学会の設立と伝統主義論争：エミール・エックと太宰施門の第一次世界大戦」、『比較文学』第50巻、2007年、95-107頁。
- 9) エミール・エック「新仏蘭西の代表的文豪：モオリス・バレス」、太宰施門訳、『太陽』、第22巻第5号、1916年5月、137-154頁。
- 10) 同上、153-154頁。
- 11) 同上、146頁。
- 12) 同上。
- 13) 新城訳『ロオレンの少女』以外で大正時代に翻訳されたバレスの作品は確認できる限り以下のものしかない。『テューレの恋』、矢野目源一訳、『世界短篇小説体系 仏蘭西篇(下)』、近代社、1926年。
- 14) 新城和一「モオリス・バレス論」、『白樺』、第4巻第4号、1915年4月、173-188頁(新城和一『真理の光』、

洛陽堂、1919年に「新しき仏蘭西とモオリス、バレス」と改題して収録)。

- 15) モオリス・バレス『根こぎにされた人々』『ペレニスの園』、吉江喬松訳、『第二期世界文学全集 第1巻』、新潮社、1932年。
- 16) 同上、7頁。
- 17) モオリス・バレス『根こぎにされた人々』(上・下)、吉江喬松訳、新潮社、新潮文庫、1939年。
- 18) モオリス・バレス『根こぎにされた人々』(上)、9頁。
- 19) モリス・バレス『コレット・ボドツシュ』、本田喜代治訳、白水社、1940年。
- 20) 『自我礼拝』、伊吹武彦訳、『新世界文学全集 第4巻』、河出書房、1941年。
- 21) 同上、523頁。
- 22) 同上、526頁。
- 23) 辰野隆「バレスの拡充」、『新世界文学全集月報』第16号、河出書房、1941年9月、1-2頁。
- 24) 『自我礼拝』、伊吹武彦訳、『新集世界の文学25 バレス』、中央公論新社、1970年。この版では伊吹武彦によって解説が書き改められ、新たに「年譜」が付け加えられている。
- 25) モーリス・バレス『科学の動員』、日本学術振興会訳、帝国大学新聞社、1938年。原書はMaurice Barrès, *Pour la haute intelligence française*, Plon, 1925.
- 26) 同上、7-8頁。
- 27) 長岡半太郎「改訂版はしがき」、モーリス・バレス『科学の動員』、日本学術振興会訳、帝国大学新聞社、1942年、7-8頁。
- 28) Maurice Barrès, *op.cit.*, p. 237.
- 29) バレスにフランスにおける科学研究の問題を知らしめ、政治的行動を促したのは 同時代を代表する化学者でコレージュ・ド・フランスの教授であったシャルル・ムールーCharles Moureu (1863-1929)であった。ムールーによる「序」を参照のこと (バレス『科学の動員』、1938年、3-31頁)。
- 30) 戦前・戦中の日本学術振興会の活動に関しては以下を参照した。國谷実『「科学技術政策から国際科学技術交流政策への展開調査」報告書』、科学技術国際交流センター、2013年、50-51頁。また日本の科学技術政策全般に関しては以下を参考にした。鈴木淳『科学技術政策』(日本史リブレット100)、山川出版社、2010年。
- 31) 長岡半太郎「改訂版はしがき」、7頁。
- 32) 石原純「モーリス・バレス著、学術振興会訳『科学の動員』」、『東京朝日新聞』朝刊、1939年3月6日。
- 33) 宮本武之輔「『工業教育の要諦：工業教育刷新論(1)』」、『東京朝日新聞』朝刊、1939年4月7日。
- 34) 同上。
- 35) 宮本武之輔に関しては以下を参照した。大淀昇一『宮本武之輔と科学技術行政』、東海大学出版会、1989年。
- 36) 宮本武之輔『科学の動員』、改造社、1941年。
- 37) 初出は工業組合中央会の雑誌『工業組合』の1941年3月号。
- 38) 宮本武之輔『科学の動員』、51頁。
- 39) 長岡半太郎「改訂版はしがき」、8頁。
- 40) ポール・プールジェ『死』、広瀬哲士訳、東京堂、1939年。この作品の受容に関しては以下の拙論を参照のこと。田中琢三「ポール・プールジェ『死』と二つの世界大戦：戦時下の日本における仏文学受容の一側面」、『比較日本学教育研究センター研究年報』、お茶の水女子大学比較日本学教育研究センター、第7号、2011年3月、293-300頁。

* 本稿は科学研究費補助金(課題番号25770124)の助成を受けた研究成果の一部である。